



著者近影

情熱大陸 事始め

私の放送人生

第18回

元毎日放送 (MBS)

河村 盛文氏

1998年4月5日、日曜23時、

『情熱大陸』の1回目が放送された。初回はプロゴルファー・丸山茂樹さんがマスターズ・トーナメントに初挑戦する直前の様子取材した。その後のラインアップは有森裕子さん、佐々木主浩さん、爆笑問題さん、市川染五郎さん、千葉すずさん、北野武さん、と続く。ジャンルを問わず、トップをめざし、その世界にイノベーションをもたらす人を追いかけるというのが、番組のコンセプトだ。

番組を企画し、プロデューサーを務める僕は当時43歳。ようやく番組がスタートしたものの、毎週毎週30分の内容を完成させ、放送に間に合わせるのが精いっぱい、先の見えない日々だった。社内からはそんなに期待されていなかったと思う。当時の編成部長からは「1年つないでくれたらええよ。その間に次の企画を用意してくから」と言われたぐらいだ。それから27年……。10人近くの歴代プロデューサーたち、数多くのディレクター、スタッフの手に

よって、1300回を超える番組になろうとは、まったく想像すらできなかった。「わが放送人生」と語るのはおがましいが、この番組スタートに至る道のりなどを『情熱大陸事始め』として綴りたい。

スタートは『MBSナウ』

毎日放送に入社したのは1977年のこと。毎日放送はその前年に、夕方のローカルワイドニュース『MBSナウ』を関西エリアでいち早くスタートさせていた。僕は入社4年後に報道局へ。大阪府警や司法の記者クラブまわりを経て、『ナウ』の遊軍ディレクターになった。

それはちょうど、フィルムで撮影し編集する時代がほぼ終わり、代わってENGカメラがニュース取材の主役に定着する大きな転換期でもあった。フィルムは数分で1巻が終わわり、交換するという制約があったが、ENGになり、たっぷり撮影し、自由に編集することが可能となった。現場の音も漏れなく付いてくる。



報道の編集ブースで編集集中？

おまけに、当時の関西エリアはグリコ森永事件、暴力団山口組と一和会の抗争、阪神タイガース38年ぶりの優勝など、全国から注目を集めるネタに事欠かなかった。関西のテレビニュースは熱かったのだ。その時代に『ナウ』の先輩記者・ディレクターたちは「報道」や「ニュース」というカテゴリーの概念を越え、好奇心の赴くまま斬新な企画を連発していた。僕たちの世代はその背中を見て、あんなこともできる、これもイケると刺激を受けた。『ナウ』は格好のトレーニングの舞台だった。

初めての「ゴールデン体験」

10年近くが経ち、ゴールデンタイム全国ネットの自然科学紀行シリーズ『新ビーグル号探検記』に参加しないかと声がかかった。番組は「チャールズ・ダーウィンが19世紀に見た地球を20世紀の視線で再検証しよう」というもので、毎日放送開局40周年記念特番の冠もついていた。大学時代探検部で過ごした僕にとっては願ってもないチャンス。

シリーズ11本のうち、「マダガスカル編」と「総集編」を取材、演出することになった。



タイ・ロケにて。左から2人目が筆者。
右端は作家の塩野米松さん



マダガスカル・ロケにて。カメレオンと遊ぶ

シリーズ全体は東京のプロダクションやフリーのディレクターとの競作で、大阪の報道しか知らなかった僕に新しい世界を見せてくれた。

中でも、シリーズ初回「イギリス編」のナレーション録りの日のことはよく覚えている。演出は龍村仁さん。いわゆる「NHKキャロル事件」の伝説のディレクターだった。夜、赤坂の編集室に行くと、MA作業が佳境を迎えていた。龍村さんの指示で、大英博物館の石の廊下を歩く中沢新一さんの靴の音をカツ、カツ、カツと響かせる。続くカフェのシーンでも、ティーカップを置く音をカシャツと立てた。

龍村さんが「もつと立てていいよ」と調整卓に身を乗り出す。その、音の演出によって、本編はどんな彫りが深くなっていた。

完パケが終わると、龍村さんはバックパックをひよいと背負い、ロードバイクに乗って夜の赤坂に消えていった。タクシーなどには乗らないのだ。その一挙手一投足にしばれた。

クリスマスイブの原宿で

さて、次に東京で全国ネットの番組にトライするチャンスがめぐってきたのは1995年末のことだった。『地球発22時』シリーズなどの情報番組をヒットさせたプロデューサー・信濃正兄さんが、木曜20時の情報系新番組を始めることになったのだ。

立ち上げの会議はクリスマスイブ、場所は原宿の、とあるバー。街の喧噪から離れ、ビルのエレベーターで指定の階に。降りるとバーに直結、ほぼ真つ暗な空間にピンスポット、カサブランカの花がどかんと飾られ、濃密な香りを漂わ

せている。

ほどなく、会議のメンバーが続々集まってくる。信濃さんを筆頭に、みな個性的な出で立ちだ。その夜の会議はいわば「信濃組」の再結成の場だった。原宿でさえ不案内な僕にとっては、いきなり虎の穴に放り込まれたのも同然の気分だった。

この日から仕事場は東京に移り、信濃さんの下の二番手プロデューサーとして、新番組『グラフィティ'96』の立ち上げが始まった。

番組はオールロケスタイル、テーマは1週ごとの読み切りなので、毎回、制作会社もディレクターもナレーターも違う。信濃さんがいわばハブ空港のような立場で、制作会社それぞれから信濃さんのもとに「こんなネタはどう？」と話が上がってくる。信濃組では大きな会議はなく、個別打合せの積み重ねで週ごとの内容や担当の会社が決まっていた。

信濃さんは各回のディレクターをととても大事にしていた。シリーズ全体の責任は局のプロデューサー

ーにあるが、各回の演出の主役はディレクターという仕分けがはっきりしていた。編集プレビューなどを通じて議論になることもあったが、信濃さんとディレクター双方が納得の上、次に進んでいった。「おまえさんはどうしたい?」「そう言うなら任せるよ」という言葉をよく聞いた気がする。今なら、ディレクターへのリスペクトというところだろうか。思えばクリスマスイブ、信濃さんが原宿のバーに召集したのも構成作家ではなく、ディレクターたちだったのだ。

この木曜20時のシリーズで、後の『情熱大陸』につながる要素を含んでいたのが、郷ひろみさんに密着取材をした回だった。放送の後、コラムニストのナンシー関さんが週刊文春の『テレビ消灯時間』に、その回を採りあげた。いわく、こうしたテーマでは、相手の協力を得て取材しているのだから、対象を批判することが難しく、ほめるしかないのは理解できる、しかし、この番組はどうにもほめ方に芸がない、という。なるほど、そう

なのだ。以つて銘とすべし。

もうひとつは、その回でナレーターの窪田等さんと出会ったこと。窪田さんの仕事は、フジテレビ『F1グランプリ中継』オープニングの叙情的なナレーションで見聞きしていた。この回で初めてお願いをしたのだが、想像通りの丁寧な仕事ぶりだった。この人なら、レギュラーで毎週顔を合わせてもお互いにやっていけると思った。

『ウルルン』に出会った

木曜20時の情報番組は97年9月で終了、僕は日曜22時の『世界ウルルン滞在記』のプロデューサーを引き継ぐことになった。『ウルルン』はテレビマンユニオンの1社制作、そして既にスタートして2年半が経過、上々の人気番組になっていた。週に1度の全体会議には「みなさん、初めまして」から入り、ユニオンの白井博プロデューサーの隣に座る。ただし「これはテレビマンユニオンの会議なので、あなたは発言してもいいけど意見は言わないで。スタッフが迷うと困るから」

と釘をさされた。

ある日の会議、若いディレクターが企画の提案で口を開いた。「インドで」。白井さんは間髪を入れず「ボツッ!」と応じる。秒殺どころか瞬殺だった。インドで、の後は誰も何も聞いていない。だが、ボツだ。企画会議の後の居酒屋で「もう少し内容を聞かなくていいんですか?」と聞いた。すると白井さんから「一つ、インドは視聴率が出ない。二つ、あのディレクターの表情にまるつきり自信がない。従ってあれ以上聞いても時間の無駄」と返ってきた。

このウルルンチームは一朝一タでできたわけではない。日曜あさ11時〜11時30分枠で1989年から4年半にわたって続いた『地球ZIGZAG』という番組があった。『ZIGZAG』の「海外、ホームステイ」というコンセプトをもとに、日曜22時にブラッシュアップしたのが『ウルルン』だ。シリーズを長く続けているから、外来新参の僕から見れば、そこは一家のような空気を感じた。この一家は長い時

間を共にし、議論し、飯を食い、番組を作る。喧嘩もある。時として放送局と対峙し、闘うこともある。ぼんやりしていると斬りこまれるような緊張感があった。

プロトタイプは俵万智

こうして、クリスマスイブの原宿会議から東京での2年が過ぎた。日々充実はしていたが、自分の企画でレギュラー番組をスタートさせたいという気持ちはずっと持ち続けていた。

その発想は10年ほど遡る。大阪で『MBSナウ』の遊軍ディレクターをしていた頃に作った「新時代の歌人・俵万智」の7分の企画にプロトタイプがあった。これは俵万智さんが当時、神奈川県立高校で国語の教師をしている様子などを取材し、そのなんとも魅力的な短歌の世界を紹介したものだ。

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまったいいの

寄せ返す

波のしぐさの優しさに

いつ言われてもいいさようなら

あいみでの

のちの心の夕まぐれ

君だけがいる風景である

(すべて『サラダ記念日』より)

などなど、その作品はたいへん新鮮で、既に短歌の世界で新人賞などを受けていた。ただ、世の中ではまださほど知られていず、ましてニユース企画としては短歌の心象をどんな映像にするのかなど、難問を抱えていた。

だが、泉俊行カメラマンの映像と俵万智さん自身の朗読によって幸い好評を得、全国ネットの『JNNニユースコープ』のスコープ特集でも再度放送された。その後、歌集『サラダ記念日』が発行され、280万部のベストセラーになった。そのことが10年経つても頭にあり、新しい才能の持ち主、その

分野を変革する人、海外にも打つて出る人、を取材する毎週読み切りの番組、という発想になった。「凡人は自らの成功体験を模倣する」というらしいが、まさにその典型である。

折も折、1997年の秋、東京支社編成部のY君、営業部のT君から相談があつた。「日曜23時から30分はMBの発枠だが、現行番組の打ち切りが濃厚だ、そこでメインスポンサーに別の企画を提案し、つなぎとめたい」というのだ。このY君、T君はいずれも大阪の報道時代の後輩で、僕の志向性も理解してくれている。さっそく、前記の人物ドキュメンタリーを企画書に仕立てあげ、提出した。仮タイトルは「野望大陸」。毎回の人物の心に秘めたものを野望と表現したのだ。

メインスポンサーはアサヒビール。当時はまだビールの売上が2番手で、トップに追いつき追い越そうというところだった。企画書には、今トップにいる人ではなく、これからトップをめざす人を探りあ

げると書いた。この売り文句がはまったのかどうか、この番組は1998年4月にスタートすることが決まった。

ウルルンと世界遺産の間で

仮タイトルの「野望大陸」とはどういう意図か？ その頃、日曜22時は『世界ウルルン滞在記』、23時30分は『世界遺産』、つまり23時は「世界」を冠にした二つの人気番組にはさまれていたのだ。そこに、こじんまりしたタイトルで肩身の狭い思いはしたくない。新聞ラテ欄の字数から短い方がいい。また、世界をめざすような人を取材するのだから……とまずは「〇〇大陸」とした。僕なりの必然だったのだ。

それはいいが、「野望」はダークなニュアンスがあるのでと周囲から説得が入った。番組タイトルを決めるのはプロデューサーだと突っ張ったが、前述した編成部のY君から「新番組のスタートなんだから、みんなが番組を応援できるようにした方がいい」と諭され、

折れた。タイトル決定、野望は捨て『情熱大陸』とした。今から思えば「野望」にしないでよかった。

よろよろスタートしたが・・・

毎回の企画はオープンに募集する、全体会議はしない「信濃方式」。スタート当初は木曜20時枠や『新ビッグル号探検記』を通じてお付き合いのあつた制作会社を中心に声をかけた。ナレーションは窪田等さん、スタジオなしのオールVTRの番組だから、声と語り口はとても重要だ。

一本一本の企画にゴーサインを出し、相手先の了承が得られたら取材が始まる。制作会社からは時折、方向性の相談などを受ける。放送日は取材の進み具合などでスライドする。放送日が決まれば、2週間ほど前からは編集ブースをのぞきプレビューを繰り返す。すんなり定尺になることもあれば、構成の変更を繰り返して、泥沼にハマることもある。

ディレクターは週変わりだし、いわゆる撮れ高もまちまち、それは

今も変わらない。しかも、スタート当初は定型めいたものや共通の約束事も何もなかった。毎週毎週、よく言えばバリエーションに富んでいた。実のところは、控えめに言っても、てんでバラバラだったと思う。

テーマ曲は葉加瀬オリジナル

そんな番組に一本の筋を通し、引き締めたのが葉加瀬太郎さんのテーマ曲『情熱大陸』だ。実はスタートしてから半年余り、オープニングはこの曲ではなく、エンディングも葉加瀬さんの『エトピリカ』ではなかった。TBS『新世界紀行』の『自由の大地』のように番組の顔になる曲を求めたが、決めきれずに番組がスタートしてしまったのだ。

夏が過ぎ、第24回の「ヴァイオリニスト・葉加瀬太郎」の回、葉加瀬さんが自分のライブで『エトピリカ』を演奏していた。それを聞いてひらめいた、エンディングはこの曲だ。番組のラスト、ひと仕事終えた主人公が帰路につく、次のヤマに向かう前のつかの間の風…：さっそく、エピックで葉加瀬さんを

担当していた青木聡さんに連絡し、エンディングテーマにすることの許諾を得た。

さらに、オープニングを葉加瀬オリジナルで作ってくれないかと依頼した。「イメージは？」と聞かれ「主人公はF1鈴鹿グランプリのスターティング・グリッドについている。ここに選ばれていることの恍惚と不安。そしてスタート！ 1コーナりの混乱を切り抜け、S字カーブへとアクセルを踏む。しかし、レースはまだ始まったばかりだ！…これを30秒で」と依頼した。青木さんも、そこまで言ってもらったら作りやすいと応じてくれた。

そして1週間後、ぴつたり30秒のデモテープができ上ってきた。まさにイメージ通りで驚き、一発OKを出した。これでようやく番組のアタマとエンディングが定まった。各回のディレクターもそれによつて、構成のイメージがしやすくなったと思う。最初は名前のない30秒の曲も、やがて葉加瀬さんによつてフルバージョンとなり、その名も『情熱大陸』となった。ふ

らふらしていた番組もこの曲を得て、ようやく形が決まった。

曲の評判も上々、僕が最初に伝えた言葉が葉加瀬さんにインスピレーションを与えたのだ、と秘かにほくそ笑んでいた。

だが、番組スタート2周年を祝うパーティーでのこと、挨拶に立った葉加瀬さんが曲の誕生の経緯を語った。「局のプロデューサーから、フジテレビのF1中継みたいなイメージでと言われ、手持ちのメロディーの中からAとB、それっぽいのを2つ選んでくつつけたら、ちやうど30秒になりました…。」と。

いや、話がだいぶ違う、パーティーに来ていた青木さんを見つけ「あれだけイメージを伝えたのに、僕が言うたことを端折りすぎやん」と抗議したが、彼は「いやあ、太郎ちゃんにはちゃんと言うたんですけどね、彼も話を面白くするからなあ」ととぼけた(三人とも大阪出身)。

わずか30秒のデモテープにやがて『情熱大陸』と曲名がつき、今では葉加瀬さんのコンサートで観

客総立ちの人気となっている。時には演奏が十数分に及ぶことも。人の熱が注入されて、楽曲も成長するのだと知った。



2017年の情熱大陸ライブで熱演する葉加瀬さん

なぜ27年続いたのだろう

そんな風に頼りないスタートだったが、番組は改編期を何度も乗り越え、27年間続いてきた。それはなぜだろう。アサヒビールさんがスタートから変わらず提供してくださっていることや視聴者の支持はもちろん大前提だが、番組に関わるスタッフの熱量という点はとても大きいと思う。

『情熱大陸』はローテーションで担当が回って来るわけではない。

ゆえに、ルーティン・ワークでなんとなく作るということがない。つまり、制作チームから言えば、この人のことを知りたい、取材したいというのが毎回ゼロからのスタートになり、モチベーションが新鮮に保たれるのではないか。一週一週、次の走者にバトンを託してきたら、ここまで来てしまったということだろう。ビールも番組も「鮮度が命」なのだ。

次世代が育つ舞台として

僕はスタートから3年間プロデューサーを務め、2001年に大阪本社に戻るようになった。その後、歴代のプロデューサーたちが『情熱大陸』のバトンをつないだ。2009年にはATP(全日本テレビ番組製作社連盟)特別賞をいただいた。その理由に「良質の番組を長く続けている。若手制作者にとつて、いつかは挑戦し目標としたい番組になっている」とあったのをよく覚えている。

というのも、僕が番組在任中に、ある企画で若手の新しいディレク

ターを起用したいと制作会社のIプロデューサーから相談があった。僕は信頼するいつものディレクターでお願いしたいと答えたのだが、反論された。

Iさんから「次の世代にチャンスを与え、育てていくのも番組や局Pの大事な仕事でしょう。だいたい局Pは自分の都合ばかりで、人を育てる事に無関心すぎる」とお叱りを受け、戒められたことがあったのだ。だから余計に、この授賞理由がうれしかった。

最近では『情熱大陸』を作りにくくてこの世界に入った若手もいるらしい。一方、27年前は若手、中堅だったディレクターたちは大ベテランになり、制作会社の中では世代交代が進んでいるとも聞く。かつて女性ディレクターはほとんどいなかったが、今スタッフロールを見ていると女性の名前が増えてきて頼もしい。

振り返ってみると僕自身『MBSナウ』から『新ビッグル号探検記』『グラフィティ'96』と、その都度、舞台に立たせてもらい、次へと進

むことができた。番組が続くことは、人を育てる舞台が続くことでもある。スタート以来27年を経過した『情熱大陸』も、その良き舞台であり続けてほしいと願っている。



アリス・紗良・オット編でUS国際映像祭ドキュメンタリー部門のグランプリなどを受賞



『情熱大陸』で2006年橋田賞を受賞スタッフとともに

河村 盛文 略歴

(かわむら・もりふみ)

- 1954年生まれ
- 1977年 京都大学文学部卒業、株式会社毎日放送入社
- 1981年より 報道局記者、ディレクターなどを担当
- 1996年 東京支社テレビ制作部
- 2002年 本社人事局人事部長
- 2005年 人事局長
- 2007年 経営戦略室長
- 2009年 取締役編成局長
- 2013年 取締役退任、株式会社MBS企画 代表取締役社長
- 2022年 退任